

青木繁の《旧約聖書物語挿絵》に関する一考察

高橋 沙希 (関西大学)

『旧約物語』は、中村吉蔵(春雨)(一八七七一—一九四一)によって、明治四〇年(一九〇七)に、金尾文淵堂から出版された聖書物語である。『旧約物語』には、計八枚の三色版の挿絵が掲載されており、この挿絵を、明治の代表的な洋画家である青木繁(一八八二—一九一一)が担当した。

鐸木道剛氏は、青木がこの挿絵を描くにあたり、水島行楊が教要社から発行した『旧新約聖經画帖』[明治三四年(一九〇一)]を参照していたことを指摘している。隠岐由紀子氏も、青木の挿絵と『旧新約聖經画帖』を比較し、両者に関連があることを認めている。この時期、挿絵が入った聖書物語が、それほど多くないことや、構図の類似からみても、青木が『旧新約聖經画帖』を参考にしたことは、間違いないであろう。

また、この挿絵の原画である油彩画、《旧約聖書物語挿絵》八点[明治三九年(一九〇六)]には、柔らかさと躍動感を兼ね揃えた青木独自の筆触が見られるのだが、同時に、色彩や賦彩法において、バラつきが確認される。その理由として、友人の正宗得三郎(一八八三—一九六二)と森田恒友(一八八一—一九三三)が、八点のうち二点を一枚ずつ描いて手伝ったからということが考えられる。この事実は、正宗が『造形芸術』第一巻・第四号[昭和一四年(一九三九)]のなかで、挿絵が期間内に出来上がらず、森田と自分が手伝ったと述べている文章から知ることが出来る。つまり八点のうち二点に、青木以外の画家の手が入っているということになる。しかし、それがどの作品に当たるのかということとは分かっておらず、資料も残っていない。そこで、本発表では、この二人が手伝った可能性のある作品を特定して、それらの作風について検討してみたい。

まず、《ソロモン王とエルサレム》は、この挿絵と同時期の森田による《すき髪》[明治三八年(一九〇五)]と類似する点が多い。丁寧で柔らかい筆遣いである点、画面が滑らかで、対象の輪郭を量していない点などが共通している。

続いて、《ネブカデネザルとダニエル》は、ネブカデネザルの目元が、正宗の《トックの女》[大正二年(一九一三)頃]に描かれている女性の目元とよく似ている。他の六点の人物と比べて、目、眉、鼻が、明確に描かれており、表情をはっきりと把握することが出来る。また、絨毯や衣服の模様なども、不自然なほど細かく描写されている。

青木の作品の特徴としては、描かれた人物に生命力があることと、今にも動き出しそうな印象を与えることの二点を指摘したい。画面を観察した結果、その特徴に当てはまらないのが、《ソロモン王とエルサレム》および《ネブカデネザルとダニエル》である。筆者は、森田が手伝った一枚を《ソロモン王とエルサレム》、正宗が手伝った一枚を《ネブカデネザルとダニエル》だと推定する。